

これまで合理的配慮に関する記事で何度か、対話が大切だということをお伝えしてきました。しかし、対話とは何かとあらためて考えてみると、けっこう興味の尽きないテーマです。会話とは何が違うのか、どうなったら対話ができると言えるのか、どうして合理的配慮において対話が大切なのか、などなど。そこで、今年度はこの「対話」というテーマを深掘してみたいと思います。

## 「会話」とは何か

日常でよく使うのは「会話」という言葉でしょう。これは複数の人が言葉を交わすことです。言葉を交わしていれば「会話」なので、挨拶や社交辞令など、中身がほとんどなくても「会話」です。人間関係の潤滑油的に、軽い楽しみとして行うもので、共感できるポイントを探ることが多いでしょう。「だよね～わかる～」の世界です。

「私たち一緒だよね」という安心を求めるわけですから、「違い」が鮮明になる話題は避けられます。政治や宗教の話が代表的ですが、障害の話もそうです。障害の話は「私たち同じ人間」という基盤に、障害を「持つ人」と「持たない人」という違いをもたらすので、「会話」においては避けられがちです。ですから、合理的配慮を実施する上で、「会話」では太刀打ちできないのです。



## では「対話」とは何か

それに対して「対話」とは、双方が「違い」を持つことを前提として、相互理解を目的に行うものです。明確な目的があるので、中身のない社交辞令では「対話」になりません。「違う」者同士の「相互」理解を目指すのですから、自分の事情を相手に話すことと、相手の事情を聴くことが、どちらも必要です。

これは、合理的配慮の実施にうってつけです。なぜなら、障害を「持つ人」と「持たない人」が互いの「違い」をよく知り、過重な負担とならない範囲で（「持たない人」の事情）、必要な調整（「持つ人」の事情）をするのが合理的配慮だからです。

また、「対話」は理解を目指しているのであって、共感を目指しているわけではありません。ここは大事なポイントなので、今回はこの共感をめぐって起こりやすい誤解を詳しく取り上げましょう。

